

5 4. 障害者の医療機関利用にあたっての課題と好事例の収集に関する調査研究

—当事者インタビュー調査からわかったこと—

研究所 障害福祉研究部 今橋久美子・清野絵

病院・障害者健康増進・運動医科学支援センター 富安幸志・矢田部あつ子・樋口幸治
飛松好子

【目的】障害のある人が、障害の原疾患以外の疾病のために医療機関を受診するにあたり、対面調査を実施し、適切な対応を受けられるよう考察する。

【方法】国立障害者リハビリテーションセンター病院の外来患者および自立支援局の利用者合計22名（うち3名は付き添い家族が同席）にインタビューを行った。障害の内訳は、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害、音声・言語機能障害（失語症）、高次脳機能障害、知的障害、それらの重複であった。インタビュー時間は30分から1時間、下記の3つの質問を中心とした。

1. これまで医療機関を受診した中で困った経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
2. 医療機関の受診において、スタッフから好ましい対応を受けた経験はありますか。それはどのようなことでしたか。
3. 適切に医療を受けるという点から見て、課題だと思っていることはありますか。

なお、本研究は、国立障害者リハビリテーションセンターの倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

1. 「アクセスに苦勞する。車いすで自走して片道1時間近くかかる。特に夏はきつい。公共交通機関がなく、タクシー（料金）が高額などの理由で最低限必要な受診以外は控えがち。自立支援局入所中は定期健診を受けるがそれ以外は機会が減る。（肢体不自由）」「検診は、自宅での検体（尿や便）の採取が難しい。初めていく場所は、病院に限らず同行援護サービスを申し込むが、支援者と日程があわないと行かれない（あきらめる）こともある。（視覚障害）」など
2. 「新型コロナのワクチン接種を通い慣れた医療機関で受けられた。（視覚障害）」「医師はホワイトボードで説明してくれる。医師との連絡はFAXを使っている。（聴覚障害）」など
3. 「親亡き後を考えて、グループホームで生活することになった。病院の付き添いは支援者に頼めるとしても、治療の選択や薬の変更を決めるのは難しいかもしれない。体調や日常の様子を本人が病院で適切に伝えられるかどうか親は判断しかねる。（知的障害・親）」など

【考察・結論】当事者対象調査では、医療機関における対応や配慮以前に、アクセスの問題が顕著であった。アクセスの困難さが、受診を控える、検診を受けないなどの受療行動に影響を与えることが示唆された。また治療方法の選択や薬の変更等など重要な決定について、家族等が同行はしないものの、電話等で主治医と話したり、判断したりしていることがわかった。昨年度実施した、支援者を対象とした調査では、受診時の問題点として接遇に関するものと設備環境に関するものが挙げられた。今回の当事者対象調査では、家族や支援者の付き添いなく、一人で通院している人がほとんどであったためか、接遇や設備環境といった医療機関内のことよりも医療機関までのアクセスに関する問題の方が重要課題と考えられた。